

**聖地 高野山と有田川上流域を結ぶ  
持続的農林業システム**

**和歌山県 高野・花園・清水地域**

**日本農業遺産保全計画**

**(第2期)**

**計画期間：令和8年4月～令和13年3月**

**高野山・有田川流域世界農業遺産推進協議会**

**令和8年3月**

## 農林業システムの概要

本システムは、物資調達が困難な「山上の聖地 高野山」において、100 を超える木造寺院を維持してきた森林育成の仕組みである「高野六木制度」、平地の少なさを乗り越え、高野山とともに発展してきた花園地域における「傾斜地を利用した仏花栽培」と、清水地域における「棚田の畦畔の農地利用による多様な植物の育成・栽培」を核とした農林業システムである。

約 1200 年にわたり、度重なる火災に見舞われてきた高野山では、建築用材として有用性の高い 6 種の針葉樹（スギ、ヒノキ、コウヤマキ、モミ、ツガ、アカマツ）について、寺院の建築・修繕以外での伐採を禁じるとともに、その伐採にあたっては必要となる樹のみを択伐し、天然下種更新や苗木の補植により森林を更新する「高野六木制度」を生み出すことで、用材の永続的な自給を可能にした。また、高野六木制度は、森林育成を統括する「総本山金剛峯寺山林部」と、山林部の方針に基づく施業を行う「高野山寺領森林組合」からなる組織体制により、安定的に継承されている。

有田川と参詣道「有田道」により高野山と繋がる花園・清水地域の人々は、農業・林業（用材生産）を主業としつつ、高野山の需要にも応える多様な農林産物を傾斜地や棚田の畦畔で育成・栽培することで、平地の少なさを乗り越え、生活を発展させてきた。

花園地域は、傾斜地を利用してシキミ、コウヤマキなどの仏花を栽培し、高野山に供給することで集落の生計を保障し、その歴史は地名の由来となっている。

清水地域は、棚田の畦畔を農地として利用し、多様な植物を育成・栽培することで生計を安定させてきた。現在、清水地域の山椒生産量は日本一を誇るが、その起源は高野山の需要（漢方薬・高野山料理）に支えられた「畦畔での栽培」であり、畦畔で育成・栽培する多様な植物の中から、時代のニーズに応える品目の栽培を拡大させてきた。

なお、当地域はかつての高野山の領地であり、豊作を高野山に祈念する「御田」（おんだ）が生まれるなど、人々は高野山への信仰で強く結ばれている。

このように、本システムは「宗教都市 高野山」の維持のみならず、高野山に続く花園・清水地域も含めた有田川上流域全体の暮らしを発展させてきた、独自の農林業システムである。

世界有数の宗教都市であり、日本人の魂のふるさとである高野山の発展は、本システムにより支えられており、持続可能な森林の経営(SDGs Goal15)、陸域生態系の持続可能な利用の促進(SDGs Goal15)及び持続可能な農業(SDGs Goal12)に資する本システムは、山間地域における持続可能な農林業の達成に貢献するものである。

## 目次

第1	はじめに	… 3
第2	課題への対応策	… 5
1	食料及び生計の保障	… 5
2	農業生物多様性	…12
3	地域の伝統的な知識システム	…13
4	文化、価値観及び社会組織	…16
5	ランドスケープの特徴	…18
6	変化に対するレジリエンス	…20
7	多様な主体の参画	…22
8	6次産業化の推進	…24
第3	モニタリング方法	…25
第4	考察	…25

## 第1 はじめに

物資調達が困難な山上に位置する高野地域及び有田川を通じて高野山に続く花園・清水地域の人々は、本システムを生み出すことで高野山の発展を支えるとともに、平地の少なさを乗り越え、日々の暮らしを発展させてきた。

年間 150 万人の参拝観光客を集める世界有数の宗教都市「高野山」の発展を、「寺院建築・修繕用の木材自給」で支える高野六木制度は、「総本山金剛峯寺山林部－高野山寺領森林組合」の組織体制により、安定的に維持されている。

また、高野山の需要の下で発展した多様な農林産物（仏花、山椒等）の栽培については、地域主導による6次産業化の取組等が展開されており、教育機関－地元－行政による協働活動も積極的に展開されてきた。

このように、本システムにより発展してきた当地域であるが、農林業者だけでなく、地域の高齢化・過疎化が進行しており、集落活動の存続が危ぶまれている。

表1 人口の推移

単位：人

	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年
高野町※	6,386 (100%)	5,355 (84%)	4,632 (73%)	3,975 (62%)	3,352 (52%)	2,970 (47%)
花園地域	659 (100%)	614 (93%)	514 (78%)	384 (58%)	307 (47%)	246 (37%)
清水地域	5,511 (100%)	5,138 (93%)	4,616 (84%)	3,739 (68%)	3,125 (57%)	2,529 (46%)
和歌山県	1,080,435 (100%)	1,069,912 (99%)	1,035,969 (96%)	1,002,198 (93%)	963,579 (89%)	922,584 (85%)

資料：国勢調査

※高野町全体の値（農業遺産の高野地域以外も含まれている）

（）内は対1995年比

表2 農林業経営体の推移

単位：経営体

	2005年	2010年	2015年	2020年
高野町※	29 (100%)	24 (83%)	29 (100%)	15 (52%)
花園地域	69 (100%)	44 (64%)	10 (14%)	2 (3%)
清水地域	417 (100%)	377 (90%)	256 (61%)	173 (41%)
和歌山県	28,516 (100%)	25,752 (90%)	22,072 (77%)	18,335 (64%)

資料：農林業センサス

※高野町全体の値（農業遺産の高野地域以外も含まれている）

（）内は対2005年比

そこで、高野山・有田川流域世界農業遺産推進協議会（以下、「協議会」という）で策定されていた保全計画を基に、日本農業遺産の認定を受け、本システムの保全活動や地域活性化に繋がる取組を地域で行っていくことになった。

認定当初は、コロナ禍でヒトとの交流が制限される中、思うような活動はできなかったが、徐々に各種観光・体験、イベントなどを通じて地域内外に農業遺産の魅力を発信していった。

また、協議会は、シンボルとなる統一ロゴマークを作成、広報媒体や商品などに活用し、本システムを広く周知 PR するとともに、ストーリーを活かした新たなブランド化を図っていった。

第2期保全計画では、第1期の成果と課題や世界農業遺産等専門家会議からの助言等を踏まえ、引き続き、以下の取組を行っていく。

- ・各種観光・体験、イベントなどを通じ、農業遺産の魅力や情報を県内外へ発信し、本システムの認知度向上を図る。
- ・農業遺産のストーリーを活かし、商談会等への出展、積極的な情報発信、商品開発を支援し、地域製品の付加価値向上による所得向上につなげる。
- ・大学や企業との協働活動に加え、農林水産省が推進するオフィシャルサポーター制度を活用し、関係人口の創出を図る。
- ・地域に居住する U・I ターン者など担い手を確保育成していく。

## 第2 課題への対応策

A 脅威及び課題の分析 : A- (1)、A- (2)、A- (3)・・・と示す。

B 脅威及び課題への対応策 : Aに対応する形で、B- (1)、B- (2)、B- (3)・・・と示し、その中の取組をア、イ、ウ、・・・で示す。

### 1 食料及び生計の保障

#### A- (1) 高野六木制度・長伐期施業

高野六木制度は、寺院建築・修繕用材を自給するための制度であり、木材価格の高騰や世界的な大径木の不足等に対する抵抗性を有している。高野六木制度や寺有林における長伐期施業の特徴である「択伐」は、皆伐に比べて作業効率が低く、収益性の向上にはハード面での条件整備が必要である。

なお、世界遺産「高野山」における林内路網整備では、遺産保全上の対策（熊野古道から見えない位置への敷設など）が必要となるが、これら対策は観光資源としての森林活用にも貢献する。

第1期では、高密な路網整備により原木運搬効率の改善を行った。今後も整備していく。

#### B- (1) 高野六木制度・長伐期施業におけるハード面での条件整備

##### ア 林内路網の整備（高野地区）

本取組は、総本山金剛峯寺山林部の方針により経営計画を作成した高野山寺領森林組合が施業し、高野町及び県は施策的支援〔森林路網整備事業・国庫〕を行う。山林部と山林経営委員会では林内路網密度の目標値を300m/haと設定しており、第1期の路網整備では355m/haと目標を上回る結果となった。今後も更なる条件整備のため、高規格道と支線をセットにした再整備をし、高密度の林内路網を維持していく。

成果目標：林内路網密度 R6年度 355m/ha → R12年度 300m/ha 以上を維持

※高規格道・支線の再整備による原木の運搬効率の改善を含む。

貢献度：高野六木制度の維持

関与者：総本山金剛峯寺山林部、高野山寺領森林組合、高野町、県

予算等：町、県、国の支援事業

#### A- (2) 仏花コウヤマキの栽培

西日本を中心に、仏花コウヤマキの需要は高まりをみせており、コウヤマキ栽培

は今後も生計の手段としての役割を果たし続けている。しかし、その栽培には多くの労力を要し、高齢化の進行に伴い、地域外業者にコウヤマキの収穫・出荷を委託するケースが出始めており、収益の地域外流出が懸念されている。

コウヤマキ栽培では、充実した枝葉を育てるために、適切な枝打ち・間伐が必要となるが、高齢化に伴い、その実施が困難になっていくことが想定される。そのため、生産者で連携し技術を共有していく必要がある。

## B-（2）仏花コウヤマキ栽培における実態把握と省力化技術の検討・共有

### ア コウヤマキ生産者、栽培面積などの実態把握

花園地域では、引き続き栽培面積・栽培者等の実態を町が把握し、産地のグリップ力強化を図る。

成果目標：R1年度～ 町による調査実施 → 継続して毎年調査 貢献度：仏花コウヤマキ栽培の維持 関与者：かつらぎ町、花園夢づくりの会、協議会、県 予算等：町
---

### イ 生産者研修会による省力化技術の検討・共有

生産者研修会を定期的で開催し、省力化技術の検討・共有を進め、生産者間の連携を図る。

成果目標：随時実施 → 1回/2年で実施 貢献度：仏花コウヤマキ栽培の維持 関与者：協議会、県、高野町、かつらぎ町 予算等：県、国の支援事業
---

## A-（3）傾斜地を利用した持続的な農業（清水地域の山椒栽培）

高野山の需要に支えられた「傾斜地・棚田の畦畔」における多様な農林産物の栽培畦畔での栽培を起源とし、清水地域の山椒は日本一の産地にまで発展した。更に、軽量作物であるから、棚田での栽培（水稲からの品目転換）も進んでおり、山椒栽培は高齢化に対応した営農形態として地域の生計を支え続けている。

一方で、本システムにおける「山椒と高野山の結びつき」についてはあまり知られていなかったことから、高野山と連携したプロモーションが行われている。

また、近年のぶどう山椒は、スパイス文化のあるヨーロッパを中心に海外でも高い評価を得ており、山椒加工品の海外への販路が開拓され始めている。

## B-（3）販路開拓による所得向上

## ア 山椒と高野山の結びつきに着目したプロモーション

清水地域においてぶどう山椒の加工品を製造する 株式会社 全笑は、農業遺産の取組を契機とし、山椒を通じて高野山と清水地域を結ぶ「高野山プロジェクト」を始めた。今後も「高野山と山椒の結びつき」に着目したプロモーションを行い、シンボルマークを活用したPRを行っていく。

成果目標：R4 年度～ 農業遺産を活用した販売 → R8～R12 継続した取組

貢献度：山椒と高野山の結びつきを周知

関与者：民間事業者、JA、協議会、有田川町、県

予算等：民間事業者、JA、協議会、町、県

## イ 海外販路の開拓

海外の商談会を通じ、引き続き海外販路を開拓していく。海外での現地商談会の開催は県が行い、商品PRは6次産業事業者自らが行う。

成果目標：R6 年度 海外プロモーション2回/年 → 1回以上/年

貢献度：海外販路の開拓

関与者：県、民間事業者、JA

予算等：県

## A-（4）農業と林業の兼業による生計保障

当地域は県内有数の林業地帯で、現在、様々な林業への取組を行っている。令和2年度からは木質バイオマス発電所（900kw）の操業が始まるなど、新たな木材利用の動きも生まれている。

また、林業経営者、木材加工業者、森林組合、学識経験者（京都大学フィールド科学教育研究センター）及び行政による「有田川町林業振興センター」（R4）を立ち上げ、林業を通じた地域活性化を推進しているところである。

農業をしながら林業をするというスタイルの「ながら林業」は、清水・花園地域の住民が農業閑散期に高野山へ出向き林業をすることで生計保障してきたという本システムを参考にしたともいえる取り組みであり、「U・Iターン者」の移住・定住を推進するとともに農林業従事者の確保にも繋がっている。また、この「ながら林業」は事業主が作業の内容と期間を「ながら林業」の登録者に示し、登録者の都合により参加することができるシステムとなっており、地元住民の生計保障にも役立っている。

令和4年に作成されたリーフレット「木を伐る」では、先輩U・Iターン者から認定地域内でのライフスタイルが紹介されており、就業相談会や林業体験イベント、

トークイベント等で配布することで田舎暮らしの魅力について発信し、新たなU・Iターン者の確保に貢献している。

また、既存の「移住フェア」や農業遺産イベントでPRを行うことで、新たなターゲットに情報を発信するとともに、地元出身の若者の地域定着にも貢献するものと期待されている。

#### B- (4) 新たなライフスタイルを求めるU・Iターン者の確保

##### ア 農業・林業体験等の実施

農業・林業体験等を行うことで、新たなターゲットに情報を発信するとともに、地域定着を図る。

成果目標：農業・林業体験等を開催、リーフレット作成・ながら林業の取組

→ 農業・林業体験等 1回以上/年 開催

リーフレット配布 50部/年

貢献度：農業と林業による生計保障

関与者：協議会、U・Iターン者、有田川町、県

予算等：協議会、町

##### イ U・Iターン者の確保

U・Iターン者を確保するため、県の移住者農林水産就業者事業等を活用し支援する。

成果目標：R6年度 17人\* → 10人以上/年

\*17人のうち農業 12人（但し、農業遺産地域外を含む）、林業 5人

貢献度：担い手の確保

関与者：町、県、協議会

予算等：県、国

#### A- (5) 鳥獣害の被害

野生鳥獣による農作物や森林への被害は全国的に深刻化しており、担い手の高齢化・減少が進む当地域においても、営農意欲の減退、耕作放棄地の増加等をもたらす、農林業の持続可能性を脅かす大きな課題となっている。引き続き、様々な対策を講じる必要がある。

#### B- (5) 鳥獣害対策

和歌山県では地域-行政の連携による様々な鳥獣害対策を実施しており、取組を継続し、被害を減少させていく。

##### ア 鳥獣害対策の実施

鳥獣による被害を防ぐため、下記の各種対策を支援し、被害額軽減を図る。

### 県内で行う鳥獣害対策

- ・防護柵等の設置 [国、県、町予算]
- ・和歌山県農作物鳥獣害対策アドバイザーの設置
- ・「狩猟の魅力研修会」による狩猟者の育成・確保
- ・鳥獣害対策の研修会 [県予算]
- ・県試験研究機関における鳥獣害対策に係る研究 等

成果目標：R7年度 各種支援策を実施 → 継続した実施  
鳥獣による農作物被害額\*  
R6年度 47,756千円 → R11年度 33,429千円 (R6比 30%減)  
\*3町全体の値 (農業遺産認知地域以外のエリアを含む)

貢献度：農林業の鳥獣被害減少  
関与者：県、町、国  
予算等：県、町、国の支援事業

### A- (6) 本システムのストーリーを活かしたブランド化

「高野六木の森」の管理過程で生じる間伐材や長伐期施業による木材の一部は、「高野霊木」として扱われ、高野山の神聖さを活かした逸材として全国各地の寺院の建築や仏具など、信仰にまつわる用途において高い需要がある。農業遺産の認定を契機に、「高野霊木」の端材や精油を活用した商品をブランド化した。

また、シンボルマークを作成し、商標登録を行い、ピンバッジ作成、パンフレット等 PR 物資への掲載、各種イベントにて認知度向上に向けた PR 活動を実施した。シンボルマークは当地域の価値を高めるツールとなり、今後も活用して農業遺産認定による付加価値向上を創出していく。

### B- (6) 本システムのストーリーを活かしたブランド化

#### A 商品のブランド化

本システムのストーリーを活かした商品を増やし、新たなブランド化の検討を行う。また、開発された商品は、農業遺産に関連した説明も行っていく。

成果目標：第1期「高野霊木」の端材や精油を活用した商品をブランド化  
→ R8～ 新たなブランド化の検討

貢献度：商材の付加価値向上、農業遺産認知度向上  
関与者：協議会、町、県、  
予算等：協議会、町、県

#### イ 「農業遺産シンボルマーク」を活用した PR

協議会で各種イベントにて認知度向上に向けた PR 活動を実施。また、認定地域内生産者・加工事業者の活用を推進する。

成果目標：第1期 シンボルマーク作成、商標登録、各種イベントでのPR  
→ R8～ シンボルマークを活用したPR イベントの実施  
3回/年

貢献度：商材の付加価値向上、農業遺産認知度向上

関与者：協議会、町、県

予算等：協議会、県

#### A-（7）本システムのストーリーを活かした加工品の開発

商品開発が資金面等で難しい中、農業遺産の認定が契機となり、地元の特産品を再確認することで、既存商品のリニューアルや新商品の開発に繋がり、地域内外へPRを行うことができた。

新たな商品として、コウヤマキを原材料にしたクラフトビール、高野六木の端材や精油を活用したアロマオイル、山椒スパイスなどが生まれた。

#### B-（7）本システムのストーリーを活かした加工品の開発

##### A 農林産物加工品の新開発・リニューアル

本システムのストーリーを活かし、既存の6次産業化商品のリニューアルや新商品の開発を引き続き行う。

成果目標：R3～R6 新開発・リニューアル 12品目 28商品

→ R8～R12 累計5品目 5商品

貢献度：新商品の開発と既存商品のリニューアル、農業遺産認知向上

関与者：地元食品製造者、協議会、町、県

予算等：協議会、町、県

#### A-（8）本システムのストーリーを活かした観光・体験

先にも述べているが、当地域は、農林業者だけでなく、住民全体の高齢化・減少が進行しており、集落活動の存続が危ぶまれている。本システムのストーリーを活かした観光・体験により、関係人口を創出していくことは重要である。

当地域での都市農村交流イベントを通じ、本システムの魅力を発信し、更なる参拝観光客の確保により、関係人口の増加を図る。

#### B-（8）本システムのストーリーを活かした観光・体験

##### A 都市農村交流人口

以下の都市農村交流イベントを通じて本システムの魅力を発信し、都市住民の理

解・参画のための有効な機会とする。

- ・「高野六木の森」を活かした森林セラピーや林業教室
- ・花園地域活性化推進事業
- ・体験交流工房わらしの紙すき体験
- ・田植え・稲刈り体験
- ・清水木工等体験センターでの木工体験 等

成果目標：R6年度 4,697人 → 5,000人/年

貢献度：関係人口の増加、本システムの周知

関与者：町、県、協議会

予算等：町、県、協議会

#### イ 観光協会・都市農村交流施設との勉強会

観光・体験メニューの充実においては、各観光協会・都市農村交流施設職員と協議会との勉強会を開催し、新メニューを検討する。

成果目標：R6年度 1回/年 → 勉強会1回以上/年

貢献度：関係人口の増加、本システムの周知

関与者：協議会、町、県

予算等：協議会

## 2 農業生物多様性

### A- (1) 農林業生物多様性の周知

高野六木の森は、樹齢の異なる多種類の針葉樹から構成される複層林を生み出しており、農林業生物多様性が高く、多くの生きものの生育・生息場所となっている。また、棚田・段々畑の畦畔において多様な植物を育成・栽培しており、豊かな農林業生物多様性が保たれている。

しかし、その周知は十分でないため、将来にわたる農林業生物多様性の維持のためには、地域内外の人々の理解・関心が不可欠である。

第1期では、高野六木の森における生物観察会で都市住民への周知を図り、地元住民にはシンポジウムや出前授業により周知を行った。

### B- (1) 農林業生物多様性の周知

#### ア 生物観察会（森林セラピー含む）

高野六木の森における生物観察会を、森林セラピーや小学生の林業教室等を通じて開催する。

成果目標：R6年度 103回実施 → 100回以上/年 実施
貢献度：本システムの周知、関係人口の増加
関与者：金剛峯寺山林部、高野山寺領森林組合、高野町、協議会、県
予算等：町、県

#### イ 地元住民を対象とした農業遺産シンポジウム

地元住民を対象とした農業遺産シンポジウムを開催し、畦畔の農地利用が生み出す農業生物多様性を周知する。このことは、「棚田の保全活動が農業生物多様性の保全に果たす役割」の認識による活動意欲の向上に繋がるものである。

成果目標：R5年に1回実施 → R8～R12の間に2回実施
貢献度：地域内への本システムの周知
関与者：協議会、町、県
予算等：協議会

#### ウ 地元小中学校・高等学校での出前授業

地元小中学校・高等学校への出前授業により、「身近な農業が生み出す農業生物多様性」を学んでもらうとともに、地域への誇りを感じてもらうこととする。

成果目標：R6年度 10校実施 → 6校/年 以上
貢献度：地域住民への本システムの周知
関与者：協議会、町、県
予算等：協議会、町

### 3 地域の伝統的な知識システム

#### A- (1) 知識の伝承に向けた担い手の減少

地域の伝統的な知識システムの継承に向けた最大の脅威は、農林業の担い手の高齢化・減少である。地域全体の人口が大きく減少するなか、かつてのような「地元で育ち、学卒後、直ちに就農・林業に従事する担い手」のみで、伝統的な知識システムを継承していくことは困難である。

そのため、地域外への進学後の就農・林業従事、定年帰農・林業従事、地域内の非農林家出身者の就農・林業従事やU・Iターン者など多様な担い手の確保が必要である。

また、地域の住民に加え、都市農村交流による関係人口の参画が不可欠である。

なお、新たな担い手確保には、経済・生活面における政策的支援に加え、地域の農林業に対する誇りの醸成が重要である。そのため、地元小中学校・高等学校における地域学習において、本システムの魅力を発信し、地域に対する誇りを創出する。

#### B- (1) 知識の伝承に向けた担い手減少の対策

##### ア 農林業経営体、農業従事者数、林業労働力の維持

当地域の農業遺産のため農林業の就業相談会や体験イベントを実施し、本システムを継承する農林業者（農林経営体、農業従事者数、林業労働力）の減少を抑えていく。

成果目標：農林業経営体 <sup>*</sup>	R2 年度	190	→	R12 年度	152	(R2 比 20%減)
						※H22 445 → R2 190 (57%減)
農業従事者数 <sup>*</sup>	R2 年度	374 人	→	R12 年度	298 人	(R2 比 20%減)
						※H22 700 → R2 374 (47%減)
林業労働力 <sup>**</sup>	R6 年度	67 人	→	R12 年度	60 人	(R6 比 10%減)
						※農林業センサス      **林業雇用情報調査（県調べ）より
貢献度：担い手の確保						
関与者：町、県、協議会						
予算等：町、県、国、協議会						

##### イ U・Iターン者の確保 [1- (4) イ再掲]

U・Iターン者を確保するため、移住者農林水産就業者事業等を活用し支援する。

成果目標：R6 年度 17 人 <sup>*</sup>	→	10 人/年
		※17 人のうち農業 12 人（但し、農業遺産地域外を含む）、林業 5 人
貢献度：担い手の確保		
関与者：町、県、協議会		
予算等：県、国		

#### ウ 都市農村交流人口 [1-(8)ア再掲]

都市住民の関係人口を増やすため、都市農村交流イベントを通じて本システムの魅力を発信する。

成果目標：R6年度 4,697人 → 5,000人/年
貢献度：関係人口の増加、本システムの周知
関与者：町、県、協議会
予算等：町、県、協議会

#### エ 地元小中学校・高等学校での出前授業 [2-(1)ウ再掲]

地元小中学校・高等学校への出前授業により、地域の農林業への誇りを感じてもらおうこととする。

成果目標：R6年度 10校実施 → 6校以上/年
貢献度：地域内への本システム周知
関与者：協議会、町、県
予算等：町

#### A-(2) 水資源を管理するための社会組織「田人」・「溝親」

農家の高齢化・減少が進むなか、住民のみで構成した田人、溝親のみで、水利施設を維持・管理し続けていくことは困難となる。

#### B-(2) 田人、溝親を担う人材の確保

##### ア 大学・企業との協働活動の展開

大学では和歌山大学や龍谷大学、企業では全日本空輸株式会社が、協働活動を実施した。今後も、魅力ある棚田等の農山村景観の保全のため、協働活動を続けていきたい。

成果目標：協働活動する大学・企業数 R6年度 3 → 4/年
貢献度：関係人口の増加、本システムの周知、保全・維持
関与者：協議会、町、県
予算等：町、県、国

#### イ 多面的機能支払交付金・中山間地域等直接支払交付金を活用した共同活動

多面的機能支払交付金、中山間地域等直接支払交付金を活用し、水利施設の保全活動（集落単位での共同活動）を引き続き行う。

成果目標：R7年度 22集落 → R12年度 22集落
貢献度：本システムの保全・維持
関与者：町、県
予算等：町、県、国

### A- (3) コウヤマキ栽培の担い手確保

コウヤマキの栽培には多くの労力を要し、高齢化の進行に伴い、地域外業者にコウヤマキの収穫・出荷を委託するケースが出始めており、収益の地域外流出が懸念されている。

当地域では、地域内のコウヤマキ林（高野六木の森など）から種子を採取し、苗を育てている。また、充実した枝葉を育てるためには、枝打ち・間伐が必要となるが、高齢化に伴い、その実施が困難になっていくことが想定される。

担い手不足や栽培技術を継承するため、和歌山県農林大学校において、コウヤマキ栽培を含めた特用林産物の生産・活用についての研修を、新たな担い手確保に向け行っている。

### B- (3) コウヤマキ栽培の担い手確保

#### ア 和歌山県農林大学校でのコウヤマキ栽培の研修

和歌山県農林大学校での研修は、毎年カリキュラムどおりの研修が行われ、林業事業体への新規就労者の確保と育成を図っている。今後も引き続き研修を開催するよう働きかけていく。

成果目標：研修科目「特用林産」の実施（林業経営コース）

R7年度 3回（18時間）/年 → 3回（18時間）/年

貢献度：コウヤマキ栽培の担い手確保

関与者：県、協議会

予算等：県

## 4 文化、価値観及び社会組織

### A- (1) 高野六木制度、長伐期・複層林施業

高野六木制度を維持する「総本山金剛峯寺山林部と高野山寺領森林組合」の組織体制は、高野山真言宗の総本山である「金剛峯寺」を基盤としており、財政面において高い安定性を確保しており、長期的な視点（1期10ヶ年の経営計画）に基づく長伐・複層林施業を可能にしている。

なお、世界遺産でもある高野山の周辺で営まれる林業については、その施業方針や育成理念に対する国内外の人々の理解醸成が欠かせない。

### B- (1) 高野六木制度、長伐期・複層林施業への理解

下記ア～ウの取組により、高野六木制度や長伐期施業・複層林施業による育成理念を国内外の人々に発信する。協議会は、これら活動団体に対する農業遺産制度の説明（勉強会の開催等）を行うことで、その解説・PR活動を支援する。

#### ア 森林セラピーや森林教室での説明

参拝観光客のリピーターを増やすとともに、都市住民の理解に基づく保全活動を展開するため、森林セラピーや林業教室において本システムの情報・魅力を発信する。また、外国の参加者には英語が話せるスタッフが対応する。令和6年度は目標を大きく上回る100回以上が実施され、多くの参加者に理解の醸成を図ることができた。

本取組は、金剛峯寺山林部と高野山寺領森林組合が主体となって実施し、協議会はシステムに関する情報提供を行う。

成果目標：R6年度109回 → 100回以上/年
貢献度：農業遺産及び本システムの周知、関係人口の増加
関与者：金剛峯寺山林部、高野山寺領森林組合、高野町、協議会、県
予算等：町、県

#### イ 「高野山町石語り部の会」による観光客への解説

地元ガイド「語り部」から解説する。

成果目標：語り部の案内によるウォークイベントの開催 → 1回/年の実施
貢献度：農業遺産及び本システムの周知、関係人口の増加
関与者：「高野山町石道語り部の会」、高野町、協議会、県
予算等：町

#### ウ 高野山観光情報センターでの情報発信

引き続き、高野山観光情報センターでパンフレットを設置し配布する。

成果目標：R6 年度 パンフレットを設置し普及・啓発 → 継続実施  
貢献度：農業遺産及び本システムの周知、関係人口の増加  
関与者：高野山観光情報センター、高野町、協議会  
予算等：町、協議会

#### A-（2）農耕祭事を担う人材

高齢化や若者の流出により、高野山信仰と結びついた御田や雨乞い行事などの農耕祭事を担う地域住民は減少している。

移住者の地域定着を促すツールとして「農耕祭事への参画」を活用するとともに、その成果を移住希望者向けサイト（わかやま移住・定住支援サイト）等で発信することで、更なる移住者の確保を目指す。

#### B-（2）農耕祭事の担う人材の確保

##### ア 移住者に対する参加の呼びかけ

移住者の参画促進は、町職員による働きかけ等を最初のステップとし、引き続き地域内外にインターネットやパンフレットの配布により参加を呼びかけ、「システムに果たす農耕祭事の役割」を周知していく。

成果目標：R7 年度 随時よびかけを実施  
→ イベントでパンフレット配布 2 回/年  
貢献度：担い手の確保  
関与者：かつらぎ町、有田川町、協議会  
予算等：町、協議会

##### イ 地元住民を対象とした農業遺産シンポジウム [2-（1）イ再掲]

地元住民を対象とした農業遺産シンポジウムにおいて、本システムに関係の深い農耕祭事を周知していく。

成果目標：R5 年に 1 回実施 → R8～R12 の間に 2 回実施  
貢献度：地域内への農業遺産及び本システムの周知  
関与者：協議会、町、県  
予算等：協議会

## 5 ランドスケープの特徴

### A- (1) 農林業従事者の高齢化・減少による耕作放棄地・施業放置林の発生

高野六木の森は、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に欠かせない要素であり、関係法令（県世界遺産条例等）によっても保全が図られている。また、有田川町では有田川景観条例を制定し、棚田・段々畑による農業景観を当地固有の文化遺産として評価・保全している。

しかし、住民全体の高齢化・減少が進むなか、地域の力のみでは、農地・人工林を維持し、ランドスケープを保全していくことは困難となっている。

農地については、小規模・不整形な棚田・段々畑を主とする当地域において、担い手への集積や流動化を進めていくことには限界がある。

人工林については、その多くが柱材としての伐採時期（目安：40～50年生）を迎えており、安定的な収益確保の仕組みの構築により、施業放置森林の発生が抑止されると考えられる。

### B- (1) 農林業従事者の高齢化・減少による耕作放棄地・施業放置森林の発生抑止

#### ア 農地の維持・耕作放棄地の発生抑止

耕作放棄地については、中山間地域等直接支払制度により営農の継続を支援し、荒廃農地等利活用促進事業、和歌山版農地再生活活用支援事業によりその解消を図る。

成果目標：経営耕地面積 R2年度 140ha → R12年度 112ha (R2年比 20%減)

遊休農地 R5年度 34.4ha → R12年度 40ha (R2年比 18%増)

貢献度：本システムの保全・維持

関与者：県、町、協議会

予算等：県、町、国

#### イ 大学・企業との協働活動の展開 [3-(2)ア再掲]

大学・企業との協働において、地域で今までに企業や大学生を受け入れてきたノウハウを活かした受入体制の整備を行い、行政は地域と大学・企業間の調整及び活動成果の発信を行う。

当地域では、大学では和歌山大学や龍谷大学、企業では全日本空輸株式会社が、協働活動を実施した。今後も、魅力あるランドスケープの保全のため、協働活動を続けていく。

成果目標：協働活動する大学・企業数 R6年度 3 → 4/年

貢献度：関係人口の増加、農業遺産及び本システムの周知及び保全・維持

関与者：協議会、町、県

予算等：町、県、国

## ウ 人工林の適正な経営管理

「紀の国森づくり基金」による環境林整備を実施する。

成果目標：環境整備（間伐）面積 R6 年度 288 ha → 250 ha 以上/年
貢献度：本システムの保全・維持
関与者：町、県
予算等：県

## エ 森林保全活動を行う集落数

当地域で農林道の整備や維持管理、森林保全活動を行う集落数を維持していく。

成果目標：R6 年度 16 集落 → R12 年度 16 集落
貢献度：本システムの保全・維持
関与者：集落、町、協議会
予算等：町

## 6 変化に対するレジリエンス

### A- (1) 将来の災害への備えの検討と森林の果たす役割の周知

長い歴史の中で、当地域では杉・檜が多く植栽され栄えてきたが、木材単価の下落とともに山林への関心も低くなり、世代交代を受けた所有者の山林は施業放置林となってきた。

適切な間伐や除伐が行われない山林は木が生い茂り、やがて日差しが途絶え、下草や低木が生えなくなりつつある。加えて近年の異常気象による豪雨が影響し、下草や低木が生えず地表面が剥き出しとなった山林の土は洗い流され、木々の根は浮き、強風時には倒木する要因となっている。

このような状況の中、災害が起こりにくい森林とするため早急に森林整備を行っていく必要があり、森林所有者、林業関係者が森林整備を進めていくことが重要である。

### B- (1) 将来の災害への備えの検討と人工林の防災機能の周知

#### ア 事業推進会議での勉強会

林業振興センターによる事業推進会議において勉強会を開催し、将来の災害への備え（施業放置森の解消、計画的な路網整備等）について議論する。

なお、これまで有田川流域の森林について議論する機会は多くなかったが、農業遺産認定により議論の機会が増えてきている。

成果目標：R7年度 3回開催 → 3回/年 開催
貢献度：本システムの保全・維持
関与者：森林組合、林業振興センター、町、協議会
予算等：町

#### イ 地元住民を対象とした農業遺産シンポジウム [2- (1) 再掲]

地元での「農業遺産シンポジウム」の開催により、適正に管理された人工林の防災機能を、住民に広く周知する。

成果目標：R5年に1回実施 → R8～R12の間に2回実施
貢献度：地域内への本システムの周知
関与者：協議会、町、県
予算等：協議会

### A- (2) 石積みの保全・技術の継承

棚田の石垣・土羽の崩落の防止や災害からの復旧においては、日々の保全活動や

石積み技術の継承が重要となる。

## B-（２） 石積みの保全・技術の継承〔３－（２）再掲〕

### ア 多面的機能支払交付金・中山間地域等直接支払交付金を活用した共同活動

#### 〔３－（２）イ再掲〕

中山間地域等直接支払交付金、多面的機能支払交付金を活用した集落単位の共同活動により、石積みの保全及び石積み技術の継承を引き続き進めていく。

あらぎ島に代表される壮大な棚田景観を「地域のシンボル」としている当地域においては、地域づくりや観光の面において重要である。

また、新規就労者・移住者等、関係人口の参加を促すために、石積みの保全活動を地域密着のための交流ツールとして活用する。

成果目標：R7年度 22集落 → R12年度 22集落

貢献度：本システムの保全・維持

関与者：集落組織、有田川町、県、協議会

予算等：町、県、国

## 7 多様な主体の参画

### A- (1) 都市住民の理解・参画〔再掲あり〕

先にも述べているが、地域住民に加え、都市農村交流による関係人口の参画は不可欠で、都市農村交流とともに、当地域で行われている大学や企業による協働活動の取組も広めていきたい。

また、近年は、当地域の新たな取組として、6次産業ワーケーション導入に向けた取組が実施され、地域独自のプログラムもスタートしている。

### B- (1) 都市住民の理解・参画

#### ア 都市農村交流人口〔1- (8) ア再掲〕

都市農村交流イベントを通じて本システムの魅力を発信し、都市住民の理解・参画のための有効な機会とする。

成果目標：R6年度 4,697人 → 5,000人/年
貢献度：関係人口の増加、本システムの周知
関与者：町、県、協議会
予算等：町、県、協議会

#### イ 大学・企業との協働活動の展開〔3- (2) 再掲〕

大学や企業と地域の協働活動により、関係人口の参画を促進する。

成果目標：協働活動する大学・企業数 R6年度 3 → 4/年
貢献度：関係人口の増加、本システムの周知、保全・維持
関与者：協議会、町、県
予算等：町、県、国

#### ウ ワーケーションの推進

山椒の収穫体験など当地域ならではのワーケーションを実施し、都市住民に地域の魅力に触れてもらう。

成果目標：ワーケーションの参加者数 R6年度 126人 → 100人以上/年
貢献度：関係人口の増加、本システムの周知、
関与者：町、協議会、県
予算等：町、協議会、県

### A- (2) 林業従事者確保に向けた教育の実施

京都大学フィールド科学教育研究センター和歌山研究林における森林環境教育は、和歌山県農林大学校への進学者や森林組合等の地元の林業事業者への就職者を生みだしており、取組の継続が重要となる。

この取組は、若手林業従事者の対象者のみならず、林業に従事しない若者や地域を巣立つ若者に対しても、林業の魅力を伝えるものであり、将来における本システムへの参画に貢献するものである。

## B-（２） 林業従事者確保に向けた教育の実施

### ア 森林環境教育の継続

今後も、京都大学フィールド科学教育研究センターと和歌山県立有田中央高校清水分校との共催によるウッズサイエンス科目を継続し、当地域の林業の魅力を学生達に伝えるとともに、林業従事を志す生徒の就業を支援する。

この取組は、京都大学フィールド科学教育研究センターと有田中央高校が主体となって実施しているが、協議会は授業における本システムの魅力発信等において協力を行う。

成果目標：R6年度 のべ6人が受講 → R8~R12 累計 5人

貢献度：関係人口の増加、本システムの周知、保全・維持

関与者：協議会、町、県

予算等：町、県

## 8 6次産業化の推進

### A- (1) 本システムのストーリーを活かした加工品の開発 [1-(7) 再掲]

商品開発は資金面等で難しい中、これまでに、コウヤマキを原材料にしたクラフトビール、高野六木の端材や精油を活用したアロマオイル、山椒スパイスなどが生まれた。引続き農業遺産のストーリーを活かした加工品を開発することで、地元特産品を再確認し、新たな商品開発に繋がり地域内外へPRすることができる。

### B- (1) 本システムのストーリーを活かした加工品の開発 [1-(7) 再掲]

#### ア 農林産物の加工品の新開発・リニューアル [1-(7) ア再掲]

本システムのストーリーを活かし、既存の6次産業化商品のリニューアルや新商品の開発を引き続き行う。

成果目標：R3～R6 新開発・リニューアル 12品目 28商品

→ R8～R12 累計5品目 5商品

貢献度：新商品の開発と既存商品のリニューアル、農業遺産認知向上

関与者：地元食品製造者、協議会、町、県

予算等：県

### A- (2) 本システムのストーリーを活かした観光・体験 [1-(8) 再掲]

先にも述べているが、当地域は、農林業者だけでなく、住民全体の高齢化・減少が進行しており、集落活動の存続が危ぶまれている。本システムのストーリーを活かした観光・体験により、関係人口を創出していくことは重要である。

当地域での都市農村交流イベントを通じ、本システムの魅力を発信し、更なる参拝観光客の確保にも繋げていきたい。

### B- (2) 本システムのストーリーを活かした観光・体験 [1-(8) 再掲]

#### ア 都市農村交流人口 [1-(8) ア、7-(1) ア再掲]

都市農村交流イベントを通じて本システムの魅力を発信し、都市住民の理解・参画のための有効な機会とする。

成果目標：R6年度 4,697人 → 5,000人/年

貢献度：関係人口の増加、本システムの周知

関与者：町、県、協議会

予算等：町、県、協議会

#### イ 観光協会・都市農村交流施設との勉強会の開催 [1-(8) イ再掲]

観光・体験メニューの充実においては、各観光協会・都市農村交流施設職員と協

議会との勉強会を開催し、新メニューを検討する。

成果目標：R6年度 1回/年 → 1回/年

貢献度：関係人口の増加、本システムの周知

関与者：協議会、町、県

予算等：協議会

### 第3 モニタリング方法

協議会は、毎年度、保全計画をもとにその年度の活動内容を詳細に計画した「行動計画」を作成し、年度当初の協議会総会にて、審議を行う。

また、必要な協議会メンバーを集めた会合を定期的で開催し、活動の進捗状況を確認するとともに、必要に応じ、活動内容の見直しやスケジュールの修正等を行うことで、目標達成を図る。

年度終了前には、3町・県が中心となり活動成果をとりまとめ、目標未達成となった項目の要因分析等を行い、改善策を盛り込んだ次年度の行動計画を作成する。

そして、協議会総会において活動実績の報告及び次年度の行動計画の審議を行うことで、計画全体のモニタリング及び進行管理を行う。

### 第4 考察

本保全計画の主役は、協議会を中心とした地域住民であり、農業遺産の認定によりこれまで行ってきた様々な地域活動が、“農業遺産を維持するための活動”という意義を持っている。

さらに、農業遺産は、保全活動をともにしている大学生等にとっても、大きな誇りを生み出すほか、保全計画に沿った活動が、高いアピール力を持つこととなり、新たな応援企業の出現など、今後も波及効果が期待される。

また、保全活動の継続により、住民による地域への更なる愛着が生まれるほか、地域特産物の新たな販路開拓、観光メニューの提供等による農家所得の向上や地域経済の活性化が図られ、今後も新規就業者や移住・定住者の増加などの好循環が生まれるものと期待される。

# 世界農業遺産・日本農業遺産保全計画 取組一覧

高野山・有田川流域

取組	ページ	実施者	実施時期(年度)					指標	
			R8	R9	R10	R11	R12	現状	目標
1 食料及び生計の保障									
(1) 高野六木・長伐期施業におけるハード面での条件整備									
ア 林内路網の整備(高野地域)		◎総本山金剛峯寺山林部、高野山寺領森林組合、高野町、県	○	○	○	○	○	林内路網密度 R6年度 355m/ha	R12年度 300m/ha以上を維持
(2) 仏花コウヤマキ栽培における実態把握と省力化技術の検討・共有									
ア コウヤマキ生産者、栽培面積などの実態把握		◎かつらぎ町、◎花園夢づくりの会、協議会、県	○	○	○	○	○	R1～ 随時調査	毎年調査
イ 生産者研修会による省力化技術の検討・共有		◎協議会、◎県、高野町、かつらぎ町、		○		○		随時実施	1回/2年で実施
(3) 販路開拓による所得向上									
ア 山椒と高野山の結びつきに着目したプロモーション		◎民間事業者、◎JA、協議会、有田川町、県	○	○	○	○	○	R4～ 農業遺産を活用した販売	R8～R12 継続した取組
イ 海外販路の開拓		◎県、民間事業者、JA	○	○	○	○	○	海外プロモーション R6年度 2回/年	1回以上/年
(4) 新たなライフスタイルを求めるU・Iターン者の確保(農業と林業の兼業による生計保障)									
ア 農業・林業体験等の実施		◎協議会、U・Iターン者、有田川町、県	○	○	○	○	○	農業・林業体験等を開催 リーフレット作成・ながら林業の取組	農林業体験等 1回以上/年 リーフレット配布50部/年
イ U・Iターン者の確保		◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、◎県、協議会	○	○	○	○	○	R6年度 17人	10人以上/年
(5) 鳥獣害対策									
ア 鳥獣額対策の実施		◎県、高野町、かつらぎ町、有田川町、国	○	○	○	○	○	各種支援施策を実施	支援施策の継続
								鳥獣による農作物被害額 R6年度 47,756 千円 (※認定地域外含む)	R11年度 33,429千円 (R6比30%減)

(6)本システムのストーリーを活かしたブランド化									
ア 商品のブランド化		◎協議会、高野町、かつらぎ町、有田川町、県	○	○	○	○	○	「高野霊木」の端材や精油を活用した商品のブランド化	R8～ 新たなブランド化の検討
イ 「農業遺産シンボルマーク」を活用したPR		◎協議会、高野町、かつらぎ町、有田川町、県	○	○	○	○	○	シンボルマークの作成、商標登録、各種イベントでのPR	R8～ シンボルマークを活用したPRイベントの実施3回/年
(7)本システムのストーリーを活かした加工品の開発									
ア 農林産物加工品の新開発・リニューアル		◎地元食品製造者、協議会、高野町、かつらぎ町、有田川町、県	○	○	○	○	○	R3～R6 新開発・リニューアル 12品目 28商品	R8～R12 新開発・リニューアル 累計5品目 5商品
(8)本システムのストーリーを活かした観光・体験									
ア 都市農村交流人口		◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、県、協議会	○	○	○	○	○	都市農村交流人口 R6年度 4,697人	5,000 人/年
イ 観光協会・都市農村交流施設との勉強会の開催		◎協議会、◎観光協会、◎都市農村交流施設、高野町、かつらぎ町、有田川町、県	○	○	○	○	○	R6年度 1回/年	勉強会 1回以上/年
2 農業生物多様性									
(1)農林業生物多様性の周知									
ア 生物観察会(森林セラピー含む)の開催		◎金剛峯寺山林部、◎寺領森林組合、高野町、協議会、県	○	○	○	○	○	R6年度 103回実施	100回以上/年
イ 地元住民を対象とした農業遺産シンポジウム		◎協議会、高野町、かつらぎ町、有田川町、県	○				○	R5年に1回実施	R8～R12の間で2回実施
ウ 地元小中学校・高等学校での出前授業		◎協議会、◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、県	○	○	○	○	○	R6年度 10校実施	6校/年 以上

## 3 地域の伝統的な知識システム

## (1) 知識の伝承に向けた担い手の把握〔再掲あり〕

ア 農林業経営体、農業従事者数、林業労働力の維持	◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、◎県、◎協議会	○	○	○	○	○	農林業経営体 R2年度 190経営体	R12年度 152経営体 (R2比20%減)
							農業従事者数 R2年度 374人	R12年度 298人 (R2比20%減)
							林業労働力 R6年度 67人	R12年度 60人 (R6比10%減)
イ U・Iターン者の確保〔1-(4)イ再掲〕	◎協議会、U・Iターン者、有田川町、◎県	○	○	○	○	○	R6年度 17人	10人/年
ウ 都市農村交流人口〔再掲1-(8)ア再掲〕	◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、◎県、◎協議会	○	○	○	○	○	都市農村交流人口 R6年度 4,697人	5,000人/年
エ 地元小中学校・高等学校での出前授業〔2-(1)ウ再掲〕	◎協議会、◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、◎県	○	○	○	○	○	R6年度 10校実施	6校以上/年

## (2) 田人、溝親を担う人材の確保

ア 大学・企業との協働活動の展開	◎有田川町、◎高野町、◎協議会、◎県	○	○	○	○	○	R6年度 3(大学・企業数)	4(大学・企業数)/年
イ 多面的機能支払交付金・中山間地域等直接支払交付金を活用した共同活動の展開	◎集落組織、◎有田川町、◎県、◎協議会	○	○	○	○	○	事業取組集落数 R7年度 22集落	R12年度 22集落

## (3) コウヤマキ栽培の担い手確保

ア 和歌山県農林大学校でのコウヤマキ栽培の研修	◎県、◎協議会	○	○	○	○	○	R7年度 研修科目「特用林産」の実施3回(18時間)	研修科目「特用林産」の実施3回(18時間)/年
-------------------------	---------	---	---	---	---	---	----------------------------	-------------------------

## 4 文化、価値観及び社会組織

## (1) 高野六木制度、長伐期施業・複層林施業への理解(総本山金剛峯寺山林部－高野山寺領森林組合)

ア 森林セラピーや森林教室での説明	◎金剛峯寺山林部、◎高野山寺領森林組合、◎高野町、◎協議会、◎県	○	○	○	○	○	R6年度 109回	100回以上/年
イ 「高野山町石道語り部の会」による観光客への解説	◎「高野山町石道語り部の会」、◎高野町、◎協議会、◎県	○	○	○	○	○	語り部の案内によるウォークイベントの開催	1回/年
ウ 高野山観光情報センターでの情報発信	◎高野山観光情報センター、◎高野町、◎協議会	○	○	○	○	○	パンフレットを設置し普及・啓発	継続実施

## (2) 農耕祭事を担う人材の確保〔再掲あり〕

ア 移住者に対する参加の呼びかけ	◎かつらぎ町、◎有田川町、◎協議会	○	○	○	○	○	随時呼びかけを実施	イベントでパンフレット配布2回/年
イ 地元住民を対象とした農業遺産シンポジウム〔2-(1)イ再掲〕	◎協議会、◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、◎県	○				○	R5年度に1回実施	R8～R12の間に2回実施

5 ランドスケープの特徴										
(1) 農林業従事者の高齢化・減少による耕作放棄地・施業放置林の発生抑止〔再掲あり〕										
ア 農地の維持・耕作放棄地の発生抑止		◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、◎県	○	○	○	○	○	◎	経営耕地面積 R2年度 140ha 遊休農地面積 R5年度 34.4ha	R12年度 112ha(R2年20%減) R12年度 40ha(R5年18%増)
イ 大学・企業との協働活動の展開 〔3-(2)ア再掲〕		◎有田川町、◎協議会、◎県	○	○	○	○	○	◎	R6年度 3(大学・企業数)	4(大学・企業数)/年
ウ 人工林の適正な経営管理		◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、◎県	○	○	○	○	○	◎	環境林整備(間伐)面積 R7年度 288ha	250ha 以上/年
エ 森林保全活動を行う集落数		◎集落、◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、◎協議会	○	○	○	○	○	◎	R6年度 16集落	R12年度 16集落
6 変化に対するレジリエンス										
(1) 将来の災害への備えの検討と人工林の防災機能の周知〔再掲あり〕										
ア 事業推進会議での勉強会		◎森林組合、◎林業振興センター、◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、◎協議会	○	○	○	○	○	◎	R7年度 3回 開催	3回/年開催
イ 地元住民を対象とした農業遺産シンポジウム 〔2-(1)イ、4-(2)イ再掲〕		◎協議会、◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、◎県	○					◎	R5年度に1回実施	R8～R12の間で2回実施
(2) 石積みの保全・技術の継承〔3-(2)再掲〕										
ア 多面的機能支払交付金・中山間地域等直接支払交付金を活用した共同活動の展開〔3-(2)イ再掲〕		◎集落組織、◎有田川町、◎県、◎協議会	○	○	○	○	○	◎	事業取組集落数 R7年度 22集落	R12年度 22集落
7 多様な主体の参画										
(1) 都市住民の理解・参画〔再掲あり〕										
ア 都市農村交流人口〔1-(8)ア再掲〕		◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、◎県、◎協議会	○	○	○	○	○	◎	都市農村交流人口 R6年度 4,697人	5,000 人/年
イ 大学・企業との協働活動の展開 〔3-(2)ア再掲〕		◎有田川町、◎協議会、◎県	○	○	○	○	○	◎	R6年度 3(大学・企業数)	4(大学・企業数)/年
ウ ワークーションの推進		◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、◎協議会、◎県	○	○	○	○	○	◎	ワークショップ参加者数 R6年度 126人	100人以上/年
(2) 林業従事者確保に向けた教育の実施										
ア 森林環境教育の継続		◎京都大学フィールド科学教育研究センター、◎有田中央高校	○	○	○	○	○	◎	ウッズサイエンス科目の実施 R6年度 のべ6名が受講	R8～12年度カリキュラム受講者数 累計5人

8 6次産業化の推進									
(1)本システムのストーリーを活かした加工品の開発[1-(7)再掲]									
ア 農林産物の加工品の新開発・リニューアル [1-(7)ア再掲]		◎地元食品製造者、協議会、高野町、かつらぎ町、有田川町、県	○	○	○	○	○	R3～R6 新開発・リニューアル 12品目28商品	R8～R12 新開発・リニューアル 累計5品目5商品
(2)本システムのストーリーを活かした観光・体験[1-(8)再掲]									
ア 都市農村交流人口[1-(8)ア、7-(1)ア再掲]		◎高野町、◎かつらぎ町、◎有田川町、県、協議会	○	○	○	○	○	都市農村交流人口 R6年度 4,697人	5,000 人/年
イ 観光協会・都市農村交流施設との 勉強会の開催[1-(8)イ再掲]		◎協議会、◎観光協会、◎都市農村交流施設、高野町、かつらぎ町、有田川町、県	○	○	○	○	○	R6 1回/年	1回/年

注1)実施者について、実施者が複数存在する場合には、責任者に◎を付けてください。

注2)「指標」は可能な限り定量的なものを記入してください。

注3)セルは必要に応じて挿入、削除してください。

注4)「ページ」には保全計画本文の該当するページを記入してください。

注5)世界農業遺産への認定申請に係る承認のみを申請する場合は、別紙の第1の2(1)～(5)の5つの基準に沿って項目立てした上で記載してください。  
なお、既に日本農業遺産に認定されている地域が世界農業遺産への認定申請に係る承認を申請する場合は、別紙の第2の1～3の3つの基準に関する事項を、別紙の第1の2(1)～(5)の基準に包含する形で記載してください。

注6)実施期間は、5年間としてください。なお、世界農業遺産に既に認定されている地域が日本農業遺産の認定申請を行う場合は、現行の世界農業遺産保全計画の計画期間としてください。